



佐々木智之のテクニカル講座 上級者を目指せ！ステップアップ編

第7回 ウレタンボールをどう使う？

リアクティブボールの登場で過去のものになった感のあったウレタンボールですが、近年再び存在感を増してきました。ところが誤った知識で使っているボウラーも見受けられます。もちろん昔のウレタンボールからは大きく進化していますが、その特徴や、どういう場面で効果を発揮するのか、また注意すべき点などを解説します。

講師・佐々木智之

ささき ともゆき／1986年7月18日生まれ、神奈川県出身／2003年からナショナルチーム在籍、現在プレイングコーチキャプテン／NHK杯全日本個人選抜選手権で4度の優勝のほか、国内外で個人戦及びチーム戦で優勝多数／ヒサカプロショップ所属

2006年インドネシアのアジア選手権でウレタンボールと初めての出会い

プロのトーナメントもそのようですが、今年のNHK杯で感じたように、JBCの大会でもウレタンボールを使用するボウラーが非常に増えてきました。ウレタンボールが再び脚光を浴びている理由は、プロ、アマ問わず近年のトーナメントが難易度の高いスポーツコンディションで行われることが多くなったこと、また両手投げを含む高回転のボールを投げるボウラーが増えたことがあると思います。

ウレタンボールが全盛だったのは1980年代と聞きます。1986年生ま

れで、ウレタン時代をほとんど知らないで育った私が、初めてとっていいウレタンボールとの出会いは、2006年のアジア選手権でインドネシアに遠征したときでした。大会のコンディションがショートオイルで、当時はオイル量も少なかったため、リアクティブボールだとピン前のバックエンドの切れが強く、各国の選手が苦戦しているなか、インドネシアの選手がウレタンボールを使って攻めていました。

その会場のプロショップに、最新のボールに交じって、昔のウレタンボールが段ボールに山積みになって置かれていました。たしか1個8000円か9000円でしたが、私を含め、日本チームの男子メンバーほとんどが買って帰ったと思います。いざショートオイルのときにそのボールを使ってみると、曲がり方がアーク状で読みやすい。「オイルが短いときには有効だね」と、以来とくに国際大会で使う選手が増えています。



▲2006年のアジア選手権で買って帰ったウレタンボール

オイルの濃淡を感じにくいという特性を理解して使用場面を考えよう

最近では、とりあえずスポーツコンディションだからとか、難しいコンディションだからウレタンボールを…という風潮があるように思います。ウレタンボールの特性やメリット、デメリットをしっかりと理解したうえで使用してほしいと思います。

まず特徴として挙げられるのは、リアクティブボールがオイルの塗られているところでは滑って、塗られていない奥のところでは切れてというように、オイルに敏感なのに対し、ウレタンボールはオイルの濃淡を感じにくいため、緩やかでアーク状に曲がるという

特徴があります。そのためボールの動きが見やすく、レーンを読みやすいというメリットがあり、一般的にショートオイルやミディアムオイルのコンディションでの使用に有効とされています。

そしてウレタンボールで光っているボールはまず見かけないと思います。表面を曇らせて、手前のオイルがあるところをキャッチさせながら攻めるというのが、基本的な使用方法です。ということは、非常にキャリアダウンしやすく、レーンの変化が早いという特性があります。

コアの形状や表面素材の改良などで進化するウレタンボール

一口にウレタンボールといっても、昔のコアが入っていないウレタンとは異なり、近年はコアの形状を変えることにより、曲がりも変わってきます。カバーストックも、単純なウレタン素材ではなく、リアクティブボールにも

使われている素材を配合したものが出ています。

写真は私が最近愛用しているウレタンボールで、左のパープルパールウレタンは、素材がパールウレタンで、コアは対称コアが入っています。右のブ



▲左がパープルパールウレタン、右がブラックワイドブラックウレタン

ラックワイドブラックウレタンは、ソリッドウレタンで、非対称コアが入っています。

カバーストックよりもコアの方が曲がり方を左右する感じで、大まかな使い分けとしては、ショートオイルパターンのときはおとなしい動きの対称コアのパープルパールウレタンを、ミディアムオイルパターンくらいで曲りが欲しいときは、非対称コアのブラックワイドブラックウレタンをチョイス

する感じです。これ以外にも、各メーカーからさまざまな特性を持ったウレタンボールが発売されています。

今年のナショナルチームの合宿でも、どんなボールを持ってきているかを提出してもらおうと、ウレタンボールの割合がかなり高くなっていました。両手投げの選手などは、リアクティブボールを1個にして、ウレタンボールをメインにラインナップを組んでいる人もいました。

ウレタンボールの使いどころと留意しておきたいポイント

JBCの全国大会も最近ではオイル量が35ミリ前後のヘビーオイルで行われるのが当たり前になってきて、手前からキャッチさせたいので、スタートでウレタンボールを使う人が多くなりました。みんながリアクティブボールを投げたレーンと、ウレタンボールを投げたレーンでは、まるっきりレーンの変化が変わってきます。したがって私は、次に入るレーンの選手がどんなアングルで投げているのかに加え、最近ではウレタンボールを使用している選手が何人いるのかまで確認するようにしています。

そこで多くの方が頭を悩ませるのが、ウレタンボールからリアクティブボールへの切り替え時だと思います。ウレタンボールとリアクティブボールの動きの差が大きいので、早めにリアクティブボールに切り替えたときに激しい動きになって、投げづらく感じる場合があります。その溝を埋めるのが、最近発売されているさまざまなタイプのウレタンボールで、ウレタンからリアクティブへではなく、最近ではウレタンから別のウレタンボールへという選択肢も出てきているようです。



▲両手投げを含め高回転ボウラーの増加もあって、NHK杯でも年々ウレタンボールの使用率が高まっている

ただ、ウレタンボールはオールマイティではなく、例えばリアクティブの方が、奥で切れる分ポケットへの入射角が取れる、つまりピンアクションがいいといえます。だからどちらでもいけるなというときは、私はリアクティブボールを選択します。

またショートやミディアムオイルでも、ウレタンでなければ戦えないというものでもありません。プロの大会でも、大半のレフティーがウレタンを使っているときに、山本勲プロだけがリアクティブボールを使って、しかもトップのスコアを打っていたりします。

その場面、場面で自分に合うイメージのボールを選択するうえでの、ひとつのオプションとして、ウレタンボールが追加されたという認識でいいのかなと思います。